

八尾

～未来と歴史～（産業編）

49期生

I テーマ設定の理由

自分の町である八尾について考えた時に、あまりにも知らないことが多く、一度八尾のことをじっくりと、くわしく考える必要があると思った。また、これから八尾の将来をになっていく者として、歴史と未来を考え、その中でも、特に知らない産業に的をしばって考えようと設定した。

II 研究方法

- (1) 文献調査 河内木綿や歯ブラシと八尾の関係を事前調査するのに使う。また統計などを抜粋して使う。
- (2) 現地調査 市役所、資料館、農家、工場等で聞きとりやデータ集めをする。
- (3) 自分の考え 上のデータや結果をもとに自分が思ったことや考えを書く。

III 研究内容

1. 河内木綿について

(1) 河内木綿とは

江戸時代中期（1734年ごろ）に河内で発展した産業。稲作の副業として自家産の綿から糸をつむいで木綿を織った。生産地としては主に久宝寺の久宝寺木綿が名をはせた。

1704年、大和川のつけかえによって、多数の新田ができた。しかし、川の跡地は砂地であり、稲作よりも綿作に向いていた。そのため、綿作の拡大また綿の出荷の増加は飛躍的となった。そして河内木綿は八尾のシンボルとなって語りつがれるまでに発展するのである。

(2) 最盛期のころのようす

「大和三反、河内一反」という言葉がある。大和で三つの反物を買うのと河内で一つの反物を買うのとでは同じ値段だということだ。河内木綿の利益の良さが分かると思う。これは、大和川を下れば堺があり、大阪へも近いということで少々高価な河内木綿も買われたということだろう。

次の2つの表を見れば、米よりも綿作の方がはるかに有利性が高かったことも分かる。

▼表1 1864年淡川村（JR八尾あたり）の米・綿小作人徳分の比較

米 作 (田)		綿 作 (畑)	
取実平均	石斗 1.2	取実平均	斤 120. (A)
内 地 納 主 め	0.9	内 年 貢 引	660.00 (B)
	0.3 (a)		291.83 (C)
内 小 作 人 徳 分		内 訳 肥 料 代	200.00 (D)
			168.17 (E)
(a)の代銀 (残り)	79.509 (b)	小作人の有徳分(残り) [B-(C+D)]	

宛
E-b=88.661 (反当綿作の有徳性を示す), E/b=2.115 (綿作有徳性の倍率を示す)

注 『八尾市史』から計算した。

まず表1を見ると、小作人が綿を作る方が米を作るよりも88匁も得をして、さらに綿作は米の2倍も得をしていることになる。

これほどまでに得があるのに綿作をしない人は少ないと思う。現実に1739年の久宝寺村は、31.7町に対して綿作の面積は82.8町である。2倍以上の耕地であったわけだ。また集荷組織においては76人もいた。この集荷組織によって生産の増大と流通がスムーズに行くことを計るための価格協定があったようだ。

(3) 河内木綿の衰退

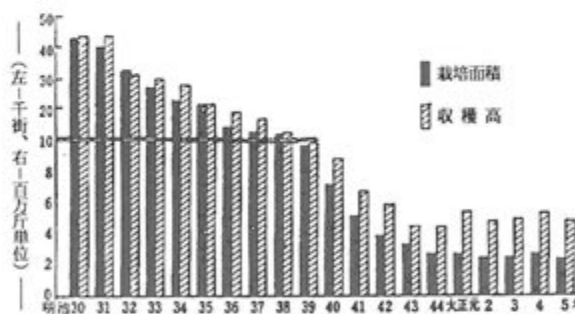
安政の開国を契機として、資本主義の生産に基づく先進文明国の諸財は、河内の綿作・綿業に最も関係のある綿が当時の輸入品の中心であった。

ではなぜ河内木綿は衰退していったのか。

まず1つめに挙げられる理由は、明治になって、文明開化が起こった。それによって日本中に紡績工場が建設された。そして、外国から次々に機械が輸入された。しかし、河内綿は毛足が短く太い綿だったために機械に通らなかった。それで、河内綿は手紡・手織であったため能率が悪く、需要に応じきれず、大量生産の機械紡績にも不向きのため衰退していったと思われる。

もう1つは、当時綿業には綿花輸入税という税があった。これを撤廃してもらいたいと綿業者が政府に願い出た。

結果、1896年3月30日「輸入綿花及羊毛海関税免除法が公布され、同年4月1日から施行されるに至ったのである。



注 農林省の調査資料が作成した。

▲図1 関税撤廃による実綿生産の推移

様態を如実に示す物である。すなわち、綿作・綿織といった有利な収入源の喪失過程にあって、この地帯にあった農民達は、不測の災難にでもあえば、最も大切な生産手段や労働対象として、かけがえのない農地を手放すしかなかったのだろう。河内木綿が、河内の経済を左右するほど大きな産業だったことが分かる。

▼表2 稲作と比べた綿作の有利性

年次	反当り実綿売上 額高(平均反収)	米2石(反当) の銀値段	綿作に対する稲作 の有利性(倍率)
文政12(1829)	225.6 (102)	158.0	1.4
13(1830)	225.4 (106)	155.4	1.5
天保2(1831)	329.4 (183)	154.6	2.1
5(1834)	339.7 (193)	207.7	1.6
10(1839)	397.0 (181)	130.4	3.0
弘化4(1847)	405.4 (233)	153.2	2.7
嘉永5(1852)	365.0 (186)	154.8	2.4
6(1853)	430.3 (212)	189.2	2.3
平均			2.13

▼表3 明治期、中河内における小作地率

郡別	明治16年 (総反別中、小 作地の比率)	明治20年 (同)	明治24年 (同)	明治30年 (同)
丹北郡	42.1%	52.0%	64.1%	平均 66.9%
河内〃	56.8	60.0	64.8	
高安〃	49.2	48.2	61.8	
若江〃	54.2	58.6	63.5	
大泉〃	40.8	40.9	50.8	
淡川〃	57.2	54.1	52.6	

(5) 河内木綿の歴史

平安に起こって、江戸に最盛期を迎えた河内木綿。やがて機械や外綿のためにその必要性がなくなり、姿を消していった。

収益性が良い時には、だれもがそれに飛びつき、それが産業として成り立たなくなると河内木綿をやめていったのである。利益だけを求めて、八尾のシンボルまでもほろぼしてしまった。

(6) 河内木綿の復元

1度はほろんだ河内木綿を復元させようと八尾でただ1人頑張っている人をここで紹介する。

八尾市小阪合町の寺尾さんがその人である。寺尾さんは19年前に河内木綿の復元を始めた。この研究をするために訪ねたのだが、下はその時の話である。

桑 ここ(畑)でどれくらい仕事をしてはりますか?

寺 朝4時から夜9時ごろまでですな。

桑 この仕事を初めて何年になりますか?

寺 19年になりますわ。もう年やし、でけへんようになってきたけど息子がやらんさかいにやめるにやめられんのですわ。

桑 なんで河内綿を作ろう思わはったんですか?

寺 役所らが河内木綿、河内木綿いうて(八尾のことを)宣伝してるけど、そんなもん八尾で河内木綿やってんのここ以外あらへん。役所もここ紹介しといてほったらかしや。昔はようけ利益あったからみんなやとったけど、利益がないと誰一人やるもんおらん。ここでやとんのも、ごっつい損なんやけどやっぱり残していかなあかんから……。人間ほんまは金だけやったらあかんし、市かって保存にもっと力入れんとあかん。そやないとマンホールみたいなん作るなりたいです。
*八尾市のマンホールに河内木綿の絵のものがある。

2. 歯ブラシについて

(1) 導入期

1893年、大阪上町の業者は、河内木綿の衰退で大きな収入源を失った八尾町の農家に対して、ブラシ植毛の技術指導を行なった。当時の原料は馬毛・豚毛柄は竹・鯨骨等であった。歯ブラシは木綿と同じく農家の副業から始まったのだ。

(2) ブラシの生産形態

企業に訪ねて知ったのだが大正には刷子の輸出もしていたそう。しかし、このころのブラシ生産は先ほど書いたように農家の副業だったのである。

ではなぜ輸出が可能になったのか。つまりそれはこのころの生産形態は製家内工業の形態を強く打ちだした形態、つまり問屋が農家からブラシを買いとり、輸出を

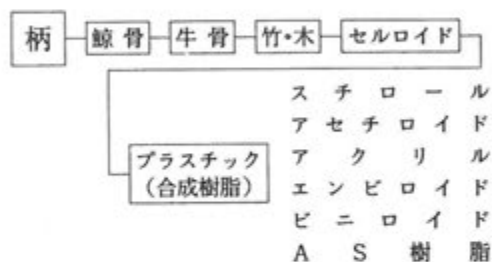
するのである。

(3) 副業から本業へ

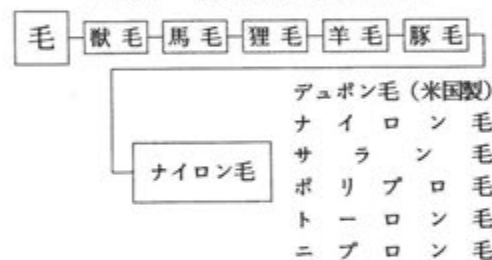
農家の副業だったブラシ産業が本業へと移っていき、いくつか企業が生まれた。商工名鑑によると大正は7社、昭和初期にも4社が産まれている。

また、このころセルロイドブラシを輸入、そして生産しはじめたのである。これは農家がやったこととは考えられない。つまりこのことも企業化していったブラシ産業を裏付けている。

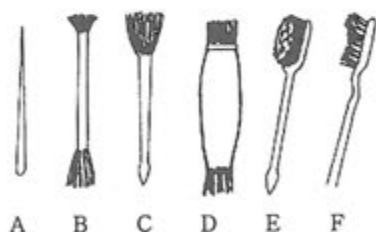
(4) ブラシの移り代わり



▲図2 柄の材質の移り代わり



▲図3 毛の材質の移り代わり



▲図4 歯ブラシの移り代わり

(5) 戦後の発展

戦前、ブラシ企業が11社であったのに対し、戦後はどっと増えて32社となった。この原因は、プラスチック、ナイロンの登場と、自動植毛機の技術開発にあったと思われる。また昭和32年には、八尾歯刷工業協同組合の設立により技術交換等が行われた。これが発展につながったと思われる。

(6) 歯ブラシの歴史

河内木綿と同じく農家の副業として起こった歯刷工業。河内木綿とちがって、うまく企業化をして行き、外国からの新素材も試行錯誤をくり返し、利用して、輸

明治7年～大正3年までは鯨骨などで大正14年から戦前戦後を経て昭和26年までがセルロイド。それ以降はプラスチックである。

毛も柄と同様に昭和26ナイロン毛に変わった。柄も毛も、昭和26年化学材質に変化したのだ。

- A 原始時代の楊枝
- B 古く支那で使われた楊枝
- C 100年位前日本の庶民が使った房楊枝
- D トルコ及イラン地方で使われた楊枝
- E 250年前くし払い。後世に歯ブラシに転用
- F 今日のブラシ

入もした。そして国内市場のほとんどが八尾産だというほど、地場産業として大きく発展した。しかし今はどんどん減少している。これは、八尾で大きくなった企業が大都市へ出て行った例が多い。

河内木綿とはちがった道をたどった歯ブラシ産業であったけれど地場産業としての姿を決しつつある。

3. 地場産業に生きた人々

(1) 西岡 吉平

明治における、八尾組の代表的木綿屋の1つがこの西岡店である。八尾の間屋で最も取扱量と店員が多かった。

他の間屋が次々に木綿をあきらめていくなかで、当店は最後の最後まで営業を続けて行くのである。

従って西岡店の営業史は、河内木綿の歴史であり、同店が閉店する1916年が河内木綿の系統死を遂げる年なのである。

河内木綿の衰退によって収入源を失う農民を見捨てられなかった人ではなかったろうか。

(2) 植田 一郎

彼は、明治5年5月に渋川村安中捨式番副戸長を勤め、同8年9月に河内国第二大区三小区四番組戸長となりその後も村政に貢献した人である。

さて、彼はかなりの骨があった人らしく明治26年国会を綿花輸入関税が通過したその年の2月20日、寒天をついて河内綿作地帯の農民二百数十名が手に手に竹槍等を押立てて大阪府庁に殺到した時、その陣頭にあったといわれている。

植田一郎氏は、綿花輸入関税撤廃の国会可決に積極的に反対するなど、身を持って地方産業の保護・育成に当たった情熱の人とみられる。

(3) 今 東光

昭和26年に八尾市天台院の住職となる。天台宗の僧で作家でもあった。彼は八尾のブラシをこう語っている。

「日本のブラシの何十パーセントはこの小さな街で生産され、僕の小説や芝居やテレビ・映画に登場しているのだが、刷子製造は家内工業から興って次第に大きな産業になりつつあることは頼もしい。

テレビ対談で会う女優は皆んな歯が美しい人ばかりで八尾のブラシを使ってくれてると喜んでる。」

IV 結 論

河内木綿も歯ブラシも農家の副業として起こり、地場産業として発展していったのだった。だからどちらを見ても農家の人たちが労働力となってきた。

しかし、労働力となって、汗水を垂らして働いた農民のもうけはそんなに大きくなかった。それに比べ、あくどいもうけ方をした間屋もあったはず。

ところで、二つの地場産業が壊滅、あるいは減少していった理由をもう一度見てみる。河内木綿は、文明開化・輸入綿などによって押しつぶされ、歯ブラシは大資本会社

(花王など)の下うけ企業になったり、大きくなって八尾を出ていく企業もあり(サンスターなど)、ブラシ業をやめる者もあった。

前にもどって改めて考えて見れば、八尾独特のものが外からの影響で失われていった。

時代の流れだからしかたないかもしれないのだが何らかの形で残して行ってほしいと思った。

今までは、八尾といえば河内木綿であり、歯ブラシであった。しかし今ではそれらが盛んであったという歴史が八尾の自慢やほこりになってしまったことが残念だ。

今では八尾は日本の縮図のごとく大企業の工場が八尾に建ち、都会化してしまって、くどいようだが本当に八尾独特の味が失われつつあり、とても中途半端な状態になっている。

これからは、もう今までのように地場産業は生まれないと思う。農業の副業ではなく農業が副業になったからだ。それに八尾は、独特のものを失ったために八尾で何かする必要もなくなった。

今、八尾は大きな決断をせまられている。伝統を守るか新しい産業をとるか。少なくとも新しい産業は八尾独特のものではない。あるいは文化を守り新たな産業と共に育てて行くのか。

人間は金だけで動いてはだめだ。これからは、もうかるように工夫したのと同じように、文化を残すためにも工夫していかなければならない。



▲写真1 寺尾さんの綿畑



▲写真2 反物を見せる寺尾さん

参考文献

- 河内木綿史 八尾市役所発行 487P
- 八尾市史 // 126P
- 八尾商工名鑑 商工会議所
- ブラシ名鑑 歯刷子工業協同組合組合



▲写真3 旧木綿屋(今は和がし屋)